

この冊子は、2012年10月28日（日）と  
2013年10月27日（日）にサクラ ファミリア  
（大阪梅田教会）で行われた「教区典礼研修会」（主催：  
大阪教区典礼委員会）でのフランコ・ソットコルノラ神父  
様（聖ザベリオ宣教会）の講演の内容をまとめたものです。

2回の講演を通して、秘跡としてのミサの意義を、歴史的  
な背景にもふれながら解き明かされました。

前半が「みことばの祭儀」（2012年度）について、  
後半が「感謝の祭儀」（2013年度）についての2部  
構成になっています。

小教区や地区単位で行われる典礼の学びや、個人の黙想  
の機会にご活用いただければ幸いです。

なお、内容についてはフランコ神父様にお目通しをいた  
だきましたが、文責については大阪教区典礼委員会が全面的  
に負うものです。



## ～目次～

### 2012年度 ミサにおけるみことばを味わう

- (1) 私と典礼
  - ① 私と典礼の関わり・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
  - ② 典礼は神様との出会い・・・・・・・・・・・・ 6
  
- (2) ことばの典礼と感謝の典礼の関係
  - ① 感謝（エウカリスチア）という言葉・・・・ 7
  - ② 「ことば」が「肉」になる・・・・・・・・・・ 8
  - ③ 過越祭の雰囲気の中で行われた動作・・・・ 10
  - ④ ハガダ（記念）から  
    エウカリスチア（感謝の祭儀）へ・・・・ 12
  - ⑤ 新しい契約の「しるし」としての血・・・・ 13
  
- (3) みことばの祭儀の各部
  - ① ことばの典礼の基本的構造・・・・・・・・・・ 16
  - ② 「朗読聖書」は神のことばの象徴・・・・・・ 19
  - ③ 朗読者の養成・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
  - ④ 朗読のために必要な準備・・・・・・・・・・ 25
  - ⑤ 朗読台・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
  - ⑥ 「ことばの典礼」の頂点—福音朗読・・・・ 26
  - ⑦ 説教（ホミリア）・・・・・・・・・・・・・・ 28
  
- (4) おわりに
  - ① 外面的参加・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
  - ② 内面的参加・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
  - ③ 神のことばの力・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30



## 2013年度 神のこひつじの食卓に招かれた人のために

- (1) 感謝の典礼 . . . . . 3 2
  - ① 秘跡としてのご聖体 —その重要性— . . . . . 3 3
  - ② 秘跡はしるし . . . . . 3 4
  - ③ 「しるし」をコンテキストから読み取る . . . . . 3 6
  - ④ 「最後の晩餐」は過越しの食事なのか? . . . . . 3 7
  - ⑤ 過越祭のできごとであった . . . . . 3 9
  - ⑥ 「家族の夕食」であるということ . . . . . 4 0
  
- (2) 感謝の祭儀の各部
  - ① キリストの生きた秘跡「聖体拝領」 . . . . . 4 2
  - ② 神の愛を「記念」する . . . . . 4 3
  - ③ 「主の死を思い、復活を讃えよう」 . . . . . 4 5
  - ④ 「生贄（いけにえ）」—キリストの死の意味 . . . . . 4 7
  - ⑤ ミサにあずかる意味 —キリストの態度にあずかる . . . . . 4 8
  - ⑥ 「神のこひつじ」にこころをこめて . . . . . 5 0
  - ⑦ 「ヨハネの黙示」のミサのイメージ . . . . . 5 1
  - ⑧ ひとつに結ばれる —コムニオ . . . . . 5 3



# 大阪教区 典礼研修会 2012年講話

## ーミサにおけるみことばを味わうー

2012年10月28日 サクラファミリア

### (1) わたしと典礼

#### ①わたしと「典礼」との関わり

フランコ・ソットコルノラです。苗字はちょっと長くて、「ソットコルノラ」。日本語に直せば「岩下」ですから、「岩下フランコ」と申します。

日本に来て、35年目になります。最初の8年間はこの大阪教区で働かせていただきまして、その時、安田大司教様に「宣教師として、日本で諸宗教対話という活動をすることはいかがでしょうか？」と相談に伺いましたら、「それはいいことです」と励ましを受けました。ですから、まず大阪でそれを実現しようと思ったのですが、いろいろな事情があって九州に移りました。九州に移ってからもう27年目です。

九州では、熊本県玉名郡の小さな村の中で祈りの家を創立しました。その祈りの家は、カトリックの信者やキリス

ト教の方々のためだけではなくて、みんなのためのものです。その場所は、いろいろな宗教の出会いの場になりますから、「諸宗教対話センター」と言い、「まことの命の山」という意味の「真命山」という名前です。

ただし、もともとの私の専門は典礼です。パリで5年間典礼を勉強してから、聖フランシスコ・ザビエルの「ザベリオ会」の神学院で16年間典礼学と秘跡の神学を教えるから、おかげさまでやっと日本に来ることが出来ました。日本の全国典礼委員会の委員として、もう27年目です。

典礼委員会の中では、ミサ典礼書を取り上げて新しい出版を考えている小委員会のメンバーの一人として働いています。その委員会でも、もう12年目になっています。

とにかく典礼は神様から私に与えられた恵みです。洗礼という大きな恵みの次に大きな恵みは、典礼を勉強することができたことだと思います。神様に感謝しています。今日もここで典礼について話すことができますことを、皆さんに感謝しています。ありがとうございます。楽しいことです。



## ②「典礼」とは神様との出会い

典礼とは、神様との出会いのことです。それよりも大きな恵み、大きな喜びはありません。それについていくら言葉で話しても、もちろん足りません。足りませんが、神との出会いの体験に向かう一歩になります。その気持で今、一時間ぐらい、忍耐をお持ち下さい（笑い）。

今日のテーマは「ミサにおけるみことばを味わう」。「味わう」……。これはいい言葉です。「味わう」というのは頭で理解することだけではありません。料理の献立をどんなに考えても、味にはなりません。口に入れて初めて「ああ、おいしい」となりますね。

「味わう」というのは、神秘体験を表す言葉です。これは典礼にふさわしい言葉です。典礼の時、私たちは頭で理解したり、頭で考えるだけではなくて、神との出会いを体験することですから、「味わう」という言葉は、とてもふさわしい言葉です。



## (2) 「ことばの典礼」と「感謝の典礼」の関係

### ①感謝（エウカリスチア）という言葉

今日は「ミサにおけるみことば」のことを詳しく取り上げたいと思います。「みことばの典礼」と、「感謝（エウカリスチア）の典礼」がありますが、どのような関係があるのでしょうか。

今、私たちは日本語で「感謝の典礼」と言っています。ただし、次に出版される予定になっている新しいミサ典礼書の中には、おそらく今の通り出版されるならば、カッコをつけて「（エウカリスチア）」という言葉も入っているんですね。

そのように決まるまでは、「エウカリスチアにしよう」とか、「その意味を日本語に訳したら感謝という意味だから、感謝の典礼だ」とか、「ただ、感謝の典礼という言葉はピンとこない。何か足りない」などとよく議論して、それでは、ということで両方を合わせて「感謝（エウカリスチア）の典礼」にしました。

そういうことで、「ことばの典礼」と「感謝（エウカリスチア）の典礼」の関係についてひとことお話しさせていただきます。

## ②「ことば」が「肉」になる

まず一つは、このことばと「肉」・・・受肉の「肉」の関係です。みことばは、つまり御父と聖霊とともに永遠の昔からおられるみことばは、肉となられたのです。それがイエス・キリストの神秘です。それについて、この典礼憲章の第6章に書いてあります。

ちょうど今年、私たちは第2バチカン公会議が始まってから50周年を迎えました。第2バチカン公会議の最初の教会へのプレゼント、世界へのメッセージは、この典礼憲章でした。『キリストはご自分が御父より遣わされたように』——受肉の神秘の続きのことですよ——聖霊に満たされたマリア様から生まれ、人となられたキリストは同じように聖霊によって、『ご自身も聖霊に満たされた使徒をお遣わしに』になりました。なお、『それは彼らが造られたすべてのものに福音を宣べ伝える』ためだけではなかった。福音——いい知らせ——神からの言葉を宣べ伝えるためだけではなかった！ びっくりするでしょう？

それだけではない、もっともっとあります。『神の御子が、その死と復活によって、われわれをサタンの支配と死より解放し、御父の国に移してくださったことを告げ知らせるためだけではなく、自分たちが告げ知らせた救いのわ

ぎを、典礼生活全体の要（かなめ）である いけにえ——（ミサの犠牲、エウカリスチアのこと、感謝の祭儀のことですよ）——と諸秘跡を通して、なし遂げるためでもあった』。告げ知らせるためだけではなくて、行われる、実現する、体験させるためであった。

ここで、みことばとみことばが肉となられたその神秘の深い関係が現れているのです。私たちはキリストを信じて神を知るだけではない、キリストを信じて、キリストを通して聖霊に満たされて、秘跡、典礼の場で神との出会いを体をもって体験する恵みを受けています。みことばの典礼と、キリストの御からだの典礼、ご聖体の典礼の深い関係はそこに一つあります。



### ③過越祭の雰囲気の中で行われた動作

もう一つ大事な関係は、みことばの典礼と、エウカリスチア——ご聖体の典礼の間の関係。

それは最後の晩餐の時、イエスさまはこの秘跡を制定してパンを取って割ってお与えになりましたね。その食事の後、杯を取って弟子たちに渡して飲ませて下さったあの動作は、しるしで、意味があるんですよ。

しるしと言えば、英語を使わせていただきますと、「text」は文章、その前後の関係は「context」といいますね。前後、その前と後の関係は大事なことです。しるしといえば、記号学にちょっと触れますが、秘跡はしるしですから、その機能、働きは、この「context」——前後は大事なことです。

例えで言いますと、信号。信号はしるしですよ。赤くなるとストップ、青くなると行くという「しるし」です。ただ、力があります。すべての交通を動かすものです。あの信号を、交差点ではなくて畑の真ん中に立てると、意味がなくなります。どうなるのですか？ しるしとしては、同じでしょう？ 信号は赤くなったり、青くなったりし続けているんですけど、意味は無いですね。

イエスさまはあの晩、どういうcontext、雰囲気の中で

あの動作を行いましたか？ ルカ、マタイ、マルコ三人共強調しているのは、過越祭の晩の食事の時でした。そうだったのです！

歴史的な状態に基づいてそう書いているか、または、そうではなかったのに、その説明をするためにその意味をわからせるためにそう書いているかは別にして——それは聖書の専門家に任せる問題です。

とにかく、どちらにしても、パウロの弟子ルカと、ペトロの弟子マルコとマタイは、「これは過越祭の雰囲気の中で行われた動作だ」とはっきりと言っています。書いていますよ。その過越祭のことを忘れてたり無視するなら、私たちはあの動作の意味をどう理解するのでしょうか？ 過越祭のcontext、雰囲気が無いと、意味、目的などちょっと足りないことがあるんですよ。

一言で言えば、出エジプトの時、つまりエジプトの奴隷の状態からこのイスラエル人の先祖は解放されたことを記念することでした。そのことを記念するために、あの晩、子どもはお父様に「どうして今夜はこんなに違った形で夕食をするの？」と聞くと、お父様は、「ああ、私たちの先祖たちはエジプトで奴隷だった。そして全部記念するんだよ」と答えます。その「記念する話」を「ハガダ」と言います。その「ハガダ」・・・「記念する話」・・・覚えておいてください。

#### ④ハガダ（記念）から

#### エウカリスチア（感謝の祭儀）へ



イエスさまはあのパンを割ってお与えになった時に、弟子たちに向かってどういう言葉を使われたのですか？

「これを私の記念として行いなさい」と言われましたよ。

「記念として」……。だから、私たちはイエスさまを記念する新しい過越し、つまり私たちはキリストによって罪から解放されたこと、死から救われたことを思い起こして、「記念・・・ハガダ」して、エウカリスチアに入ります。

このハガダのあと、イスラエル人は、「ハレル」に入った。「ハレル」は「ハレルヤ」の「ハレル」ですよ。神を誉め讃える！神が私たちのためにしてくださったことを思い起こして、「さあ、神を誉め讃えましょう」。「ハレル」は、詩編 112 番から 118 番まで。そして大きい「ハレル」は、詩編 136 番。「神を誉め讃えよう」「神を賛美しよう」。

そこで、私たちは記念するみことばの祭儀を行ってから、神が私たちのためにして下さったこのことを思い起こし、燃えたつ心をもってエウカリスチアに入ります。エウカリスチアは、神を誉め讃える、賛美する、感謝する祈りですから。その深い縁、つながりがあります。みことばの典礼がなければ、充分ではありません。感謝するし、知ってい

るから、信じているから何とかかなりますけれども、足りません。

電気の例えで言えば、コンセントに接触していないなら、電灯が明るくなりません。このアレルヤ、神を誉め讃える、感謝するエウカリスチアを捧げる喜び、意識は、「記念すること」から来ますから。そこに、みことばとキリストの体、キリストの死と復活を記念するエウカリスチアの深い関係があります。

## ⑤新しい契約の「しるし」としての血

もう一つ大事な関係を取り上げなければならないと思います。また、私たちはいつも聞いているのですけれども、最後の晩餐の時、イエスさまが話された一つの言葉に注意しなければなりません。そのことばは、マタイ、マルコ、ルカ、パウロ、コリントの手紙の中に必ず出てきます。つまり「契約」という言葉です。「この血は新しい永遠の契約の血である」。

イエスさまははっきりとその契約の意味を説明して「契約の血」と言われ、ルカとパウロは「新しい契約」と書いています。「新しい」という形容詞をつけて説明するのは、はっきりと昔の旧約の契約と比較しているからです。

ところで、あの古い契約を覚えていらっしゃいますか？

出エジプト記の24章。エジプトから逃げてきた民は・ ・ ・イスラエル人の12部族は砂漠の中でエジプトから出てからすでに3ヵ月たって、初めてモーゼは神に出会ったシナイ山の麓に来ると、そこで神さまとこの人たちの間の契約の荘厳な儀式が行われました。

この奴隷たち、この頑なな頭の人たち・ ・ ・聖書に書いてありますよ・ ・ ・神を知らなかった人たち、民を集めて、全人類、私たちみんなの前表とされた。つまり前もって表すシンボルとしました。モーゼは若者を呼んで、羊だったか牛だったかを屠らせて、その犠牲となった動物の血を鉢に入れて、その血の半分は神様を象徴する祭壇の上に注いでから、イスラエル人に神様から教えられた律法、誓いを読んで、これは「神様からあなた方に命じられたことですよ」と言い、みんなは「はい、そうします」と約束します。すると、モーゼは鉢に残った半分の血をこの12部族を象徴した12本の石で作った柱の上に注ぎながら、「これはあなたがたと神様の間で結ばれる契約による血ですよ」と。この血をもってこの民と神の間の契約を表しました。強いしるしです。

でも、日本にも何か似た習慣があったでしょ。「血判」という言葉がありますから。聞いたことありませんか？血で判を押すこと。そういう意味ですよ。

神様はこの奴隷と等しくなったことを表すためにこの印

をもって契約を結ばれました。血判のことでした。イエスさまは最後の晩餐の時、エウカリスチアの時、葡萄酒で満ちた杯を手にとって、渡して「飲みなさい。これはあなたがたと多くの人のために流される新しい契約、永遠の契約の血である」と。シナイ山のもとでモーゼがあの人イスラエル人の12部族の人たちに神様の律法を聞かせたように、そしてそれに基づいて、「はい、私たちは従います。神様の言葉を守ります」と言うと、神を象徴するものであった祭壇と12部族を象徴する12本の柱の上に血を注いで、血をもってこの契約を結ばれたのです。

同じように私たちは、みことばの祭儀の時に言われたこと、教えられたこと、神のみことばとして受けたことを「はい、守ります」「はい、私たちは神様に従います」と約束して、その契約の聖なるしるしとして、キリストの御血を注がれるのです。この強い意味があるのですよ。このcontextを忘れると、イエスさまの契約についての話はピンときません。

みことばとご聖体——エウカリスチア——すなわち感謝の祭儀との関係についての話でした。



### (3) みことばの祭儀の各部

ミサ中でのみことばの祭儀がどれほど大事なことであるかを知った上で、具体的な小さな総則に入ってもいいです。総則は大事なことですけれど、小さいものですよ。その意味を理解した上で、その深いミサの意味を信じた上で、私たちはそれを日々の生活の中で大事にすることになります。そうでないとその意味、役割がわからないのです。

では、それを心に留めて、すべてを取り上げることはできませんけれども、みことばの典礼についての、司牧の上で七つのポイントにちょっと触れてみたいのです。



#### ① ことばの典礼の基本的構造

まず第1は、ことばの典礼の基本的な構造。

それは『ミサ典礼書の総則』\*2004年5月1日初版発行  
の中で、私は55と書きましたが、55というのは『ミサ典礼書の総則』の第3版での番号で、\*前の版の33番になります。

\*『ミサ典礼書の総則と典礼暦年の一般原則』1980年4月6日初版発行

1999年4月20日発行第4版発行

神のみことばの典礼はミサの重要な部分です。聖書から取った朗読と朗読の間にある歌です。そして続けてその説明をします。つまり、その中で神様が話しておられるのですよ。それに私たちは答えるように呼びかけられています。知っているでしょうけれど、そのような意識はありますか？

このことばの典礼の時、神様が私たちに話しておられるのです。そしてそれに私たちは答えなければならぬのです。どう答えますか？ 聞くだけではことばの典礼はその実（み）を結びません。そのことばの典礼の結果、日々の生活の中で実現することが実（み）なのです。

次の箇所は、今の『ミサ典礼書の総則』に載っていません。新しい文章です。ミサ典礼書第3版の総則に初めて入れたのです。どうして入れたのですか？ やっぱり経験に基づいて、それを強調する必要があるからではないかと思いますね。聞いて下さい。

## **56 『ことばの典礼は、黙想を助けるように 行われなければならない』**

黙想……。やっぱり耳が痛い。私たちは聞くだけで、「神のことば」、「神に感謝」。ハイ、次、詩編を歌います。そして次、第2朗読、アレルヤ、福音……。

黙想とは、つまり食事の例えで言えば、食事をいただ

いて噛んで、後で消化しないとダメでしょ？ みことばも同じですよ。「私たちはみことばで養われているのです」と前の文章に書いてあります。消化、つまりこの黙想は神のことばを理解し、そして自分の心の中で、「では、私はどうするの？」とよく考えて決めると、私たちの生活がきっと変わるはずですよ。

次のポイントに行く前にこのヒントがいいでしょうね。マリア様の模範を目の前に置いておきましょう。

マリア様は天使を通してお告げを受けた時、このみことばをご自分の体のうちに受けて、自分の心のうちに受けて、みことばは肉となった、マリア様のうちに。そして、マリア様からお生まれになった。これこそが、ミサの中でのことばの典礼に与る模範です。

私たちは神のことばを受けて、信じて自分の肉、自分の体、自分の心に受け入れて、日々の生活の中で生む、素晴らしい神秘体験に招かれています。



## ②「朗読聖書」は神のことばの象徴

第2のポイントにいけますと、この神のみことばを具体的に象徴するものは朗読聖書です。それは神のことばを表すしるしです。ただ、しるしには、印されているものの意味と価値が付いているんですよ。

日本の旗を捨てたら、「あっ、何をするの！」と大変なことです。布にすぎないことではありません。あのしるしには、この国のすべてがついています。民族、その歴史、その文化、その苦勞、その希望、すべてはそこに表されているだけではなく、様々なものがついています。

そこで一つの大きな問題があります。今、私たちの日曜日のミサのために、朗読書は割合に良い本が出版されています。そしてご存知の通り、今、福音朗読書として、特別に福音の朗読のための本を出版することになりました。より良い形、より美しい形の福音朗読書です。ただ具体的に言えば・・・、ごめんなさいね、私が別に反対することじゃないけれど・・・あの（『聖書と典礼』のような）パンフレットは使ってはいけませんよ。いけません。『朗読聖書の緒言』という本に書いてありますよ。典礼委員会でプリントして下さっていますので、読んでいただきましょう。お聞きください。

35 神のことばの朗読に用いる本は、奉仕者、動作、場所、その他のことがらと相まって、自らの民に語り掛ける神の現存を聴衆に思い起させるものである。それゆえ、典礼行為において天上のものとしるしとも象徴ともなる朗読聖書は、真に品位のある、立派な、美しいものであるように配慮する。

37 祭儀で用いられる朗読聖書は、神のことばの尊厳のゆえに、司牧的な他の補助資料、たとえば朗読の準備や個人的な黙想のために作られた信者用の印刷物などで代用することがあってはならない。

どう思いますか、みなさん？ ちょっと何とか具体的に、やり直す必要がありますよ。

朗読台からパンフレットを上げて「神のことば」・・ね？  
これは具体的な問題です。例えを出します。

私は、誰もいない時、ある教会に入りました。教会に入って、もちろんイエスさまに挨拶して、この教会はどういうふうに・・・いやシスターたちがいらっしやればすぐわかりますよ、きれいに掃除しています。まあ婦人会の方も負けずに上手にされていますが・・・。そして朗読台には大きい本があるので、何の本かを見に行ったら、手で書いた福音朗読書でした。立派な字で・・・手書きで・・・。

あの教会の信者さんは協力しながら、一部分一部分ずつ、自分の手で、一年間用の福音朗読書を全部書いていました。

私は諸宗教対話の活動でよく仏教の世界、神道の世界にふれています。仏教には、お経を書く伝統があります。ことば、教え、お釈迦様の教えを大事にして、修練、心の勤めとして、それを書きます。私たちは黙想しますが、仏教はこの黙想を支えるためこのお経を書く伝統を守ってきました。今でもそうするところがあります。

私は時々、ゆるしの秘跡のつぐないとして、回心のしるしとして、「さあ、あなたはこの箇所2ページだけでいいですから、お書き下さい」と申し上げます。書きながらその意味が心に沁みこんできますよ。

まあこれはヒントですけれども、パンフレットで朗読台から朗読することをやめましょう。

### ③朗読者の養成



こんどは朗読者の養成について触れたいです。神のことばを示すしるしではありますが、それを会衆に読む務めを果たすことは、価値があります。

私がいる福岡教区でも——大阪教区でもそうしていらっしやると思いますが——聖体奉仕者のコースがあって、任命式もありますし、3年毎にまた更新式もありま

すし、大事にしています。はい、いいです。ただね、聖ヒエロニムスによりますと、キリストの体の食卓と、みことばの食卓は、同じキリストをいただくところです。この聖なる食卓も尊敬しなければならないのです。

『朗読聖書の緒言』 55 を読みましょう。

- 55 信者が神のことばの朗読を聞いて、聖書の快い生き生きとした感銘を受けるよう、この役務を果たす朗読者は、たとえ選任を受けた者でなくても、真にふさわしいものであり、よく準備のできた者でなければならない。この準備は、まず第一に霊的なものでなければならないが、技術的と呼ばれる準備も必要である。霊的な準備は少なくとも、聖書と典礼に関する養成を前提とする。**
- 聖書に関する養成は、朗読者が朗読箇所を本来の文脈において把握すること、および啓示の訪れの中心を信仰の光において理解することができるようになることを目指さなければならない。**
- 典礼に関する養成は、ことばの典礼の意味と構造、およびことばの典礼と感謝の典礼の関係の根拠を知る能力を朗読者に与えるものでなければならない。**
- 技術的な準備は、朗読者が肉声または最近の拡声装置の助けを借りて、会衆の前で読む力を日増しに身につけるものでなければならない。**

耳が痛いではありませんか？ 「あ、あなた、お願いします」と突然頼んだり、何も準備もしないまま、「はい、読みます」と言ったり……。ああ……。そのようなことは、神様のみことばに対して、良い態度ではありません。大きな疑問ですよ。

まあ「子どものミサ」は別にして、子どもたちは朗読する奉仕者としてふさわしいでしょうか？ ふさわしくないと思いますよ。少なくとも堅信を受けるまでは……。

そして時々見かけたことですが、信者でない方にも、「あ、お願いします」と頼んだり……。いや、これは、とんでもないことですよ。信仰を持って、信じて、一般の祭司職を果たして、神のことばを大切にする生活を努めて、私たちは初めてこの朗読をするようになります。キリストを信じていない方に読んでもらうのは矛盾です。彼に対しても、彼女に対しても失礼ですし、私たちも、朗読の重大さの意味がわかっていないということです。特に養成の必要性がありますし、誰でも、いつでも、朗読することができるということではありません。



#### ④朗読のために必要な準備

次は、『朗読聖書の緒言』の中で、日本語で「告知」ということばに訳しています、プロクラマツィオ、プロクラメーションです。

朗読する場合に、どういうふうに準備してから朗読するのですか？ 朗読を聞いていると、朗読をする方はわかっているのかどうか、時々疑問を感じますよ。「あの方はわかっていない・・・ただ読んでいただけですよ」と思うことが時々あります。

その中で一つ、○（まる）。文章の終わりには○（まる）があります。○（まる）は大事な文法の役割を果たしていますよ。あの○（まる）はね、ちょっと間を入れて、感動させて、今まできちんと理解してきたかどうかを調べて、はい次・・・ということです。

読み方はみことばの最初の説明です。どう読みますか？そこでそのことばの意味がわかるようになります。



## ⑤朗読台



次は、朗読台のことです。ここにはきれいな朗読台があります。祭壇とこのお御堂の雰囲気によく合っています。

ただ、いつもそうとは限りませんよ。どうすればいいですか？ 読んでみてください。

『朗読聖書の緒言』 a[神のことばを告げ知らせる場所]

3 2 教会堂の中には、的確に配置され、固定された、ふさわしい高さを持つ高められた場を設ける。それは神のことばの尊厳にふさわしいものであり、同時に、ミサには神のことばの食卓とキリストのからだの食卓が用意されていることを信者にはっきりと意識させるようなものでなければならない。また、ことばの典礼の間、信者がよく聞き取ることができ、注意を払えるような場が必要である。それゆえ、それぞれの教会堂の構造を考慮して、朗読台と祭壇との的確な組み合わせを工夫する。

3 3 この朗読台は、その構造を考慮して適宜、永続的に、または少なくとも盛儀の日などに一時的に、控え目な装飾を施すとよい。朗読台は、神のことばが奉仕者をとおして告げ知らされる場であるから、朗読台

の使用は本来、朗読、答唱詩編および復活賛歌に限られる。ただし、説教と信者の祈りは、ことばの典礼全体と深いつながりがあるので朗読台で行うことができる。その他の者、たとえば解説者、歌唱者、歌の指揮者などは朗読台に立たないほうがよい。

また、勉強になりますでしょ？ 小さなことと思われるかも知れませんが、意味があります。みことばを聞いている、宣言しているという意識があらわれるしるしですね。この朗読書とか朗読台とか、ことばの調子とか・・・。

## ⑥ 「ことばの典礼」の頂点—福音朗読



みことばの典礼、ことばの典礼の中で、頂点と思われるのは福音朗読です。そのために作られた福音朗読書が今出版されています。特別な立派な福音朗読書もあります。いつもではない、平日のミサの時はしないけれども、日曜日のミサ、特に荘厳にミサを捧げる祭日の時、入堂行列の中で、助祭がいらっしゃれば助祭、そうでない時は司祭、または朗読奉仕者が、この朗読福音書を高く上げて、行列の十字架とろうそく台のすぐあとに持って行きます。そして祭壇の上に置きます。

アレルヤを歌う時、席をはずして、真ん中に来て、ろうそく台を持っている二人の侍者と香の侍者と一緒に祭壇の前に来て、また福音朗読書を取って、助祭の場合には司祭の席まで行って祝福を願います。司教様が司式者であれば、司祭も、もし助祭の代わりに司祭が朗読すれば、司教様の前に行ってこの福音を正しく読むことができるように恵みを願います。そして司教様は祝福して行列するろうそく台の二人の侍者と、香炉を持つ侍者を先導して、そして、いつもこれをちょっと上げたまま、助祭、ならびに司祭は朗読台まで行きます。ろうそく台を持っている侍者が左と右に立ちながら、挨拶して香をかけるのです。最後には「神に賛美」を歌って、みんな答えてから、司教様が司式者であればまた司教様の所に持って行き、司教様は福音朗読書を持って十字架のしるしをして、会衆を祝福します。荘厳にすれば素晴らしいです。

やっぱりこれはキリストの言葉です。神の啓示の頂点です。アレルヤを歌いながら、荘厳に・・・できれば、必要であれば繰り返してもよろしい。

そこで工夫する・・・例えば可能性として、祭壇と朗読台の場所によりますけれど、ある教会で見たことは、助祭は司教様からまたは司祭から祝福を受けて、そして侍者は祭壇前で待っていて、祭壇に礼をしてから、会衆の前で福音朗読書を上げた時に、みな立ってアレルヤを歌い始めた

んですね。そして行列を続けて、朗読台まで行って先ほど説明したように福音朗読をしました。真ん中にちょっとだけ入れた工夫はすごく強い印象を与えて、みんな立ってアレルヤを歌い始めました。とにかく福音朗読はこのミサの中での、ことばの典礼の頂点です。



## ⑦説教（ホミリア）

最後はホミリアです。これは耳が痛いのではなくて、心が痛いですね。司祭の大事なつとめです。

ホミリアはおしゃべりではないですよ。ホミリアの役割は、今聞かせていただきました「みことば」を説明する、そしてどうすれば日々の生活の中で実現することができるかというヒントや勧めを与えて、信仰宣言に導くこと・・・つまり、ことばを受け入れる態度を勧めることです。

ヒントを一つ。ある教会で見たことです。神父さんは、毎金曜日の晩、義務ではなかったのですが教会の信者をどなたでもみんなを招いていました。大きい教会でしたから、来る人はある時は10人、ある時は15人と、できる時に参加して、神父さんは自分が説教としようと思う内容のアウトラインを見せて、それに信者からヒントをもらって、

いろいろ勧めを聞いて、反応を受け入れて、やり直して次の日曜日に説教しました。いい神父さんだと思いますよ。毎金曜日に、「自分はこういうことを言いたいですけれどもどう思いますか？ 具体的な例を教えてください」と信者に聞いて、信者からは「ああすれば・・・こうすれば・・・」と勧めを受けたり、協力を得た上で説教したのです。それも良い習慣だったと思います。

## (4) おわりに

この話の結びに、私たちの瞑想する三つの点を結論として申し上げます。



### ① 外面的参加

まず第一は、『典礼憲章』—— 第2バチカン公会議が教会に与えて下さった賜物、贈り物を大事にして、第2バチカン公会議後の典礼刷新が始まりました。」

私もその時から一生懸命協力させていただきました。

その中で私たちが目的としていたのは外面的参加です。朗読する人たちは、どうすればいいですかということで、その時までなかった朗読台を作ったり、祭壇を会衆に向かってやり直したり、聖歌隊にいい歌を歌ってもらったり、

いろいろ工夫しました。本当にどの教会でも。大体、外面的参加を中心にして、この典礼刷新を実現しました。それはいいことですが、それだけでは足りません。

## ②内面的参加

典礼はまず心の問題です。内面的参加へ導く必要があります。

典礼憲章の48番を読んで黙想をしましょう。そこには、ご聖体の神秘、ミサに与る外面的、内面的参加についての話があります。

このキリストとともに、私たちを御父に捧げる。人の救いのため。それはキリストの犠牲、自分を捧げたあの態度に与ることです。同じく、神の言葉が耳に入れば、右の耳から入って左の耳から出て行くのではなくて、耳に入れば心に、体に、入り込んで骨まで沁みこんで私たちの命になる。生活の生き方になるためです。これが内面的参加です。

## ③神のことばの力

もう一つは私が配りました最初の文章、典礼憲章の56の引用です。

そこには、ミサの中での『ことばの典礼と感謝の典礼は、

一つの礼拝行為となるように相互に固く結ばれている』  
—「礼拝」と書いてあります。ことばの典礼も「礼拝」。  
神に仕えること、神を誉めること、神を讃えること、つまり神に向かって心を上げること。神様がみことばをおこなっております。話しておられるのは神様、みことば、神のことばです。私たちの間のおしゃべりではない。私たちがやっていることではありません。イエスさまがここでそのことばをもって現存されておられます。キリストとの出会い、神との出会い、そこで、救い、喜び、生きがい生まれ、そこで力、知恵、勇気が生まれ、そして信仰・希望・愛が生まれるのです。

モーゼは山に登ってあの炎に近づいたあの時、神の声が聞こえたのです。あのことばにモーゼは動かされたのです。あのことばを聞いて、神との出会い神秘体験をすることになりました。そこで神の愛をおぼえて、山を降りて、エジプトに戻って、あの奴隷たちを解放することが出来ました。

すべてが始まったのは、あの救いの歴史・御業が始まったのは、モーゼがあのことばを聞いて信じた時。

ここに神のみことばの力、救う力があります。



# 大阪教区 典礼研修会 2013年講話 —神のこひつじの食卓に招かれた人のために—

2013年10月27日 サクラファミリア

## (1) 感謝の典礼



ここまではミサの第1の部分「ことばの典礼」についてのお話でした。ここからは、その次の第2の部分「感謝の典礼」についてです。

典礼憲章には次のように書かれています。

「ミサを構成している二つの部分、すなわち**ことばの典礼**と**感謝の典礼**は、一つの礼拝行為となるように固く結ばれています。」

第2の部分、日本語では現在「感謝の祭儀」といいますが、これは聖書の言葉であるギリシャ語の「エウカリスチア」、すなわち感謝すること、イエス・キリストが最後の晩餐の時におこなわれた動作「感謝を捧げ・・・」に基づいています。だから、「感謝の祭儀」は、まさに、キリストがああ晩に行われた動作を繰り返すこと、にほかなりません。司祭はキリストの代理として、キリストは司祭を通してその動作を繰り返しおこなっているのです。

## ①秘跡としてのご聖体 —その重要性—

このことはまた、カトリックの用語で「秘跡」といいます。「秘跡」は、私たちの信仰によれば、聖書よりも大事なものです。そういうことを言えば、ある人は「え？聖書よりも大事なものがあるのですか？」と驚きますが、本当に、聖書より大事なものは、キリストが最後の晩餐の時におこなわれたあの動作です。

「聖書」は「キリストについてのお話」ですが、「ご聖体」は「キリストそのもの」です。イエスさまはマタイに「マタイ、私の言うことをちょっとメモしなさい。そしていつか書きなさい」と言われたことは・・・（もしかしたらあったかも知れないけれど・・・）多分ないと思います。

でも、あの最後の晩餐の時、パンを割って弟子たちにお与えになった時は、「私の記念としてこれをおこないなさい」と言われました。教会の、私たちの宝物として、これ以上大事なものは無いのです。

もちろん、聖書は大事にします。聖書も大事な宝物ですが、ご聖体の次にしましょう。私たちが受けた一番素晴らしい賜物は、キリストご自身がくださったその御身体、御血だけでなく、死に打ち勝って復活し、私たちの間に、今も、本当に現存しておられることです。私たちはこのことを思いながら、ミサの第2部分で、あの最後の晩餐を繰り返し記念するのです。

## ②秘跡は「しるし」

「秘跡」の「秘」は「秘める」の「秘」ですね。隠れているものをあらわすしるし。隠れた何かをあらわすしるしです。「しるし」にはその後ろに意味があるということです。私たちが目で見ているものは「しるし」に過ぎないものですが、この「しるし」によって、隠れた意味を見出すことができます。

「しるし」というのは、人間のあいだでは、時にすごい、素晴らしい、大事な役割を果たしています。たとえば、信号を思い浮かべてみてください。赤の時は止まりますね。そうしないと危ないです。お巡りさんに「どこに住んでいますか？」と聞かれて、罰金を取られる。事故にもつながります。もう一つ、日本では印鑑をよく使いますね。ヨーロッパではサインをするだけですが、日本ではハンコを押すことがしるしになります。車とかお家とか土地とか、何か高価なものを買う時に会社と契約して、お金を払って、最終的にハンコを押しますね。ハンコを押した後で、「やっぱりやめます。お金を返してください」と言っても「あなたはハンコを押しました」ということで、すでに売買が成立しているからもう簡単に解消できませんね。

このように「印鑑」という「しるし」には力があります。

またもう一つ、結婚式のことを考えてみてください。「あ

あなたはこの方を夫としますか？ 妻としますか？」という問いに「はい」という言葉だけで、夫婦になります。「はい」という言葉は、しるしにすぎないのだけど、力があります。

さて、キリストがおこなわれた動作も「しるし」ですが、何の「しるし」でしょうか？ キリストが与えてくださった「秘跡」の秘められたものは何なのでしょう？ この「しるし」を通して、私たちは何を体験することになるのでしょうか？

「秘跡」には「隠れたもの」があります。その「隠れたもの」は「しるし」を通して現れるだけではなく、現存する、ここにある、私たちが体験することができるのです。

また「しるし」の前後周囲にあるもの（用語ではコンテキストと言います）も大事です。

たとえば先ほどの信号ですが、交差点でなくて畑に持って行って立てたら意味がなくなりますね。田んぼの中で赤になったり青になったりしても飾りにもなりませんね。もう一つ、いいことをした人を褒めるのは普通ですが、失敗した時に褒めるのは逆に失礼ですね。車の運転を失敗した時に「あなたは上手ですね」と言ったら、これは褒めているのではなくて皮肉っていることになるでしょう？

こんな風に、キリストが最後の晩餐でおこなわれた動作についてもその前後（コンテクスト）を忘れてはいけません。



### ③ 「しるし」をコンテクストから読み取る

ヨハネによる福音書では13章から最後の晩餐の場面が始まりますが、ヨハネによる福音書は、後書きみたいな部分を含めると全部で21章あります（だからもともとは20章）。

ヨハネはその中の4分の1の13章から17章まで、最後の晩餐のことをとりあげて、それだけを話しています。

「初めにことばがあった」から始まって、キリストの死と復活までを書き記したうちの13章から17章、その短い文章の中で、最後の晩餐を取り巻く環境や前後をよく話しています。

13章は「さて」という言葉から始まりますが、これは「今まで書いてきたキリストのおこなわれたすべてのことは、これから書くことの準備にすぎない」という意味になります。

『過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り・・・』。

この「過越し」という言葉ですが、ご存じのように、神

の民イスラエルは昔エジプトで奴隷として苦しんでいましたが、神とモーセに導かれて先祖の地に入るという「出エジプト」を経験しました。「過越し」は旧約聖書の基本的、中心的な出来事です。

イエス・キリストはあの過越しの出来事をご自分の前表とし、これから新しい過越しを始められるのです。この世から御父のもとに帰ること、それも自分一人だけでなく、全人類を連れて行き、神のもとに私たちを死から救い、罪から解放するという新しい過越しです。だからこの「過越し（祭）」というコンテクストは大事で、これを忘れたらご聖体の意味がわからなくなります。



#### ④ 「最後の晚餐」は過越しの食事なのか？

歴史的に、共観福音書マタイ・マルコ・ルカの福音記者は、3名とも「イエス様が最後の晚餐の時、弟子たちと一緒に食事をされたのは、過越祭の律法に定められた食事であった」と、はっきりと書いています。そしてその夜、イエス様は捕えられて、次の日に殺されて、三日目に復活したと書いています。

しかし、ヨハネは別のカレンダーに従って書いており、13章から17章まで、イエス様の最後の晚餐のことを書いているにもかかわらず、過越しの食事の話は出て来ません。

そして次の日（つまり処刑された日）、ファリサイ派やイエス様に反対していたイスラエル人たちは、イエス様をローマ帝国の総督であるピラトのもとに連れて行っていきます。イスラエル人は死刑を執行することができなかったからです。ローマ帝国に属していた国には許されていなかったのです。だから異邦人であるピラトのもとに連れて行きました。でも、彼の家には入らないで外からピラトに訴えました。

ヨハネはそれについてこう書いています。

**『その晩、過越祭の小羊を食べるはずだったから、異邦人の所に入れば汚れてしまつて過越祭の小羊を食べることができなくなる。』**

だから、ヨハネによるとユダヤ人たちはまだ過越祭の食事をしていないことになります。マタイ・マルコ・ルカとは違うのです。どうしてですか？ これにはいろいろな説があります。

一例をあげましょう。

当時、エルサレムで過越祭を行う人は非常に多かった（10万～20万人）。エルサレムだけでしか過越祭の食事ができなかったので、地方（ガリラヤを含む）や、外国から帰ってくる人たちもいたのです。このすべての人々が、半日（午後）の間に小羊を屠って神殿に捧げることは不可能でした。

そこで、エルサレム外から来た人は、1日前か2日前にし

てもよいことにしたのです。ガリラヤから来ていたイエス一行も、2日前に過越祭の食事をした。だからヨハネは「エルサレムに住んでいた人たちはまだ過越しの食事をしていなかった」と書いたのではないか？

さらにヨハネは、その福音書の中で、最初にイエス様が登場された時に洗礼者ヨハネの言葉を用いて「見よ、神の小羊」と2度紹介しています。彼によれば、イエス様が殺されたのはちょうどその午後、神殿で小羊が屠られた時でした。だからイエス様は十字架につけられ、「新しい過越しの小羊として死んだ。新しい出エジプトのしるしとして、これから私たちをみんな、奴隷の立場から、滅びの死にいたる身から、罪人の状態から解放して、御父のもとに連れて行く、新しい過越しの小羊である」と、強調したかったのではないか。

## ⑤過越祭のできごとであった



いずれの福音記者にしても、キリストの死は「過越」として理解されています。だから私たちは、ご聖体を祝う時には、過越祭をおこなっているのだということを忘れてはいけません。過越祭に祭壇の上で屠られた小羊が捧げられたように、キリストが生贄として捧げられたその御からだをいただき、私たちのために流された御血をいただいて、

私たちは過越祭を祝っているのです。最後の晩餐というテキストにある過越祭というコンテキストを忘れてはなりません。私たちは最期の晩餐を記念していると同時に、過越祭を祝っているのです。

## ⑥「家族の夕食」であるということ

ヨハネの福音書にあるもう一つの大事なコンテキストは『夕食の時であった』という文です。

出エジプト記の12章と13章では、過越祭の小羊の食卓についての指針が詳しく書いてありますが、繰り返し繰り返し出てくるのは、これが「家庭の中での食事」ということです。家族として集まり、それぞれの家族の人数に応じて、大きい小羊、小さい子羊を用意し、家族で食べるのです。食べることができたのはイスラエル人だけでした。一緒に住んでいても、よその国の人には食べることはできませんでした。小羊を食べることは、イスラエルの民族に属しているということを確認すること、アイデンティティのしるしでした。

ですから、この食事にあずかる私たちは、家族、それも神の子の家族であることを体験し、「教会は家族である」と宣言するのです。これも大事な大事なことです。最後の晩餐というテキストにある家族というコンテキストです。

では、最後の晩餐の時イエス・キリストがおこなった動作—しるし—はどういう意味だったのでしょうか？

『これを私の記念としておこないなさい』とおっしゃったのは、どういう意味なのでしょう？ 私たちはミサの時にいつもこのことばを聞きますが、それについて十分考えているのでしょうか？ イエス・キリストのなされた動作、ご自分がおこなった動作—しるし—を繰り返しなさいとおっしゃったのですね？

では、どんなことをなされたのですか？

マタイ・マルコ・ルカ、そしてパウロがコリントの教会への第1の手紙11章ではっきり詳しく記録しているのは、『イエスはその晩、まずパンを取り』・・（パンは、日本ならば、「ごはん」ですね。）『感謝を捧げて、それを割ってお与えになった』『同じように食事が済んで、そのあと、ぶどう酒に満ちた杯を手にとって、また賛美と感謝の祈りを捧げて弟子たちに渡された。これを飲みなさい』そしてはっきりと説明して、『これはあなたがたのために渡される、わたしの体。これはあなたがたと多くの人のために流される、私の血である』つまり、単なる「体」ではなく、あなたがたのために死に渡される、犠牲となる私の体、殺されることになっている私の体。そして、あなたがたと多くの人のために流される血・・・血を流すことは死ぬということですね。はっきりと、その死を、私たちのために死ぬことを表して、イエス・キリストはこの動作をおこないました。

この動作が、秘められた意味を持つ「しるし」なのです。  
私たちが知りたいのはその「意味」です。

## (2) 感謝の祭儀の各部



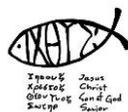
### ①キリストの生きた秘跡「聖体拝領」

ミサの中では「しるし」として、奉納行列でパンを祭壇まで持って行き、イエス・キリストの代理として叙階された司祭がそのパンをとり、また杯をとって賛美と感謝の祈りを捧げます。

イエス・キリストがなさったとおり、奉献文を唱えて。そして、パンを割り、イエス・キリストの動作を繰り返して、キリストの体であるパンを割って会衆に与え、会衆は「聖体拝領」という名でそれを受けます。

「パンを取り」「感謝と賛美を捧げ」「割って」「与える」という4つの動作を、2000年にわたって司祭はキリストの生きた秘跡として、代理者として繰り返し続けているのです。

## ②神の愛を「記念」する



では、キリストのおんからだを受ける私たちは何を  
のでしょうか？

『これを私の記念として行いなさい』ということばが  
ありますね。だからキリストを「記念」する、キリストを「思  
い起こし」ます。どのように思い起こしますか？

イエス様は神でありながら人間となられた。イエス様は  
私たちのために、ご自分の体を死に渡された。イエス様は  
私たちのために血を流された。十字架に釘つけられ、その  
体を取って、私たちに渡された。そして「わたしの体を食  
べなさい。わたしの血を飲みなさい」と言われた。自分自  
身、自分の命、自分の体、自分の血、それ以上にあげられ  
る贈り物はない・・・。

このイエス・キリストの動作は、「あなたを愛している  
よ」、「私はあなたを大事にするよ」、「あなたは私にと  
って大事なものです」という意味です。自分の体、自分の  
血、命をかけてそのようにおっしゃっているのです。

ヨハネの福音書にもありますね。

**『さて、過越しの前のことである。イエスはこの世から父  
のもとに移るご自分の時が来たことを知り（新しい過越し  
が来たことを知り）、世にいる弟子たちを愛して、この上  
なく愛し抜かれた・・・』**

ヨハネはここで、次のようなメッセージを伝えようとしているのです。「イエス様は弟子たち=私たち=あなたを愛しました。誰でもイエス様を信じて従っていけば、キリストの弟子になることができるのです。なれない人は一人もいないのです。みんな弟子となるよう招かれています。その弟子にご自分をお与えになる。ご自分の命、ご自分の体、ご自分の血、ご自分の神性までも、神であることを捨ててまでもご自分のすべてをお与えになって、その愛をあなたに証明しています。それほど愛されているのに、どうして信じないことがあり得るでしょうか」と。

日本にも「血判」というものがありました。イエス様もその血をもって、どれほどあなたを愛しているかを教えてくださいます。私たちはミサにあずかるごとに、ご聖体を受けるごとに神の愛を知るようになるはずです。命を与えるほどの愛です。これを記念するのです。神の愛をまず記念するのです。大事なことです。このことだけでも理解するなら、このことだけでも信じるならば、私たちはどれほどミサを大事にしなければならないのでしょうか？

私たちの教会の宝物のうちでも、これ以上大きなものはありません。神の啓示を証明する聖書よりも、聖書がそれについて書いているキリストご自身は、一番大事なのです。

### ③「主の死を思い、復活を讃えよう」

イエス・キリストはあの晩、パンを取って、すべての創り主である神を誉め讃えて、賛美と感謝の祈りを捧げました。この祈りを「ベラカ」と言います。

「ベラカ」は、神の存在を体験する人、神の愛を体験する人の、神を賛美し感謝する叫び、喜びの叫びです。

「ベラカ」を現代の言葉でひとつの単語に訳すことはできません。神の存在に目覚めて、神が私たちの救いのために行われたみわざに目覚めて、驚いて神を誉め讃える喜びの叫び、ということです。

イエス・キリストはパンを取って、その時代のイスラエルのどの家族の中でも家長がしたように、家族のためのパンを割って配り、そしてみんなソースに浸して食べる。これが普通の食事でした。

イエスはこのグループの家長としてパンを割ってお与えになりましたが、その時、神がこの民を選んでエジプトから解放し救ってくださったことを感謝しました。杯も同じようにされました。キリストの復活のあと、この動作を繰り返しおこなった弟子たちは、そのたびにキリストのことを思い起して、御父がその御子を遣わされたことを記念し、その恵みに驚き、喜び、感謝して祈りを捧げました。

私たちが現在用いている奉献文の中で一番古いものは第二奉献文で、218年前後にローマの司祭、ヒッポリトスによって記録されたものです。第二バチカン公会議後の典礼刷新の中でちょっと手を加えて第二奉献文となりました。

218年のあの時代でも、保守・革新の間で、「もっと別の言葉に言い換えたい」、「とんでもない、昔から使っているのはこれです」という議論はあったようです。

第一奉献文は4世紀頃のもので、聖アンブロジオがその著書に引用しています。第三と第四の奉献文は、第二バチカン公会議の後で新しく作られました。

いずれの奉献文も、キリストが私たちのために死んだこと、そして私たちの希望を与えるために復活されたことを記念して、喜び、感謝する（エウカリスチア）になります。この感謝の祭儀を捧げるには、神のみわざ、救いのみわざを思い起こさねばならない。そして思い起こし、信じると、心は感動し、喜びのあまり、この賛美と感謝の祈りを捧げずにはいられない。イエス・キリストが最後の晩餐でされたのは、その賛美と感謝の祈りでした。私たちは今、ここでそれを繰り返します。思い起こすだけでなく、体験し、感謝と喜びの叫びを捧げます。「主の死を思い、復活を讃え、告げ知らせよう。主が来られるまで」という歌はその叫びです。

#### ④ 「生贄（いけにえ）」 — キリストの死の意味

ところで「生贄」という言葉は、現代ではほとんど使われていません。命を捧げて人々を助ける、人々を助けるために命を捧げる。「犠牲」という言葉は「生贄」と同じです。

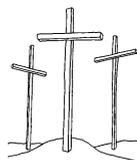
福音書の中心になるのはキリストの死とその復活ですが、十字架を忘れてはいけません。確かにイエスは十字架上で釘付けられて死にました。私たちは罪を犯して、神から離れて死に向かっていた。その私たちを、心の死からも体の死からも救うために、イエス・キリストは御父から遣わされて、神の愛をあらわして、神の証人として殺されました。

イエスは囚われて、イスラエルの民の大祭司の前に連れて行かれました。大祭司カイアファは、イスラエルの神の民として一番上位にいました。民衆のいろいろな訴えを聞き、あまり信じられなかったものだから、「はっきり言いなさい。神の子なのか？」と問いました。イエスはご自分を救うためにそれを否定したならば、神の愛の証人としての自分に与えられた使命を果たすことはできず、神が私たちをどれほど愛しておられるかを、私たちが知ることはなかったでしょう。

私たちは救われず、イエスは殺されずに済む。でも、イエスは大祭司に「そのとおりです」と答えられました。自分は殺されるけれども、それよりも私たちを愛して救いた

いと思われたからです。大祭司は「冒涇している。死刑にしよう」と宣言しました。イエスははっきりと神から遣わされた者として証しされたから、私たちを助けるために命を捧げられました。だから「生贄」と言います。

先ほども言いましたように、「生贄」という言葉は現代ではほとんど使われないので、ミサ典礼書を日本語に訳する時に、問題になりました。でも、こう言わないと、キリストの死の意味が充分伝わらないのです。



### ⑤ミサにあずかる意味 — キリストの態度にあずかる

キリストは私たちのために、私たちを救うためにご自分の命を捧げられた。ということ、私たちはミサの時にただ宣言するだけではありません。私たちはそのキリストの「態度」、ご自分を捧げるキリストの「態度」にあずかります。これが一番大事な、ミサにあずかる意味です。第三奉獻文の聖変化のあとの言葉には、『私たちも、あなたに捧げられた永遠の供え物となりますように』と、はっきり出てきます。

ご聖体 — 渡された御体— を受け、ぶどう酒 — 流された御血— をいただく時、私たちはキリストと共に、キリストの生贄としての「態度」にあずかるのです。

すなわち私たちわたしたちはご自分を捧げたキリストと一緒に、私たち自身を御父に捧げるのです。

70歳以上の方は、典礼刷新の前のことを覚えていらっしゃるでしょう。私が叙階されたのは53年前で、第二バチカン公会議の前の時代でした。その頃は、ミサの時にご聖体を受ける人は割合に少なかったです。ご聖体を受ける前に自分がそれにふさわしいかどうか糾明し、告白して赦していただいて、畏れながらようやく拝領する。今は極端から極端に走ってしまって、洗礼を受けた皆さんはどうぞ、ということになっていますが、ちょっと待ってください、と思います。

ちゃんと意識して受けているのだろうか？ キリストの御からだ、御血を受けるというのはどういう意味があるのか考えているだろうか？

「キリストの体を受ける」とは、「自分も自分の体を御父に捧げ、これからは兄弟姉妹として仕える者になります、キリストのように、自分を世界の救いのために生贄として捧げます」ということです。これがミサの意味です。キリストの犠牲にあずかることとは、こういうことなのです。



## ⑥「神のこひつじ」にこころをこめて

もう一つ、キリストがご自分を捧げたのは過越祭の場でした。過越祭の夕食を食べながら、ご自身を生贄として捧げるのですが、その夕食の中心は小羊でした。

出エジプトの時、神の民がエジプトから解放されたあの夜、人々は神の言葉をモーセを通して受け入れ、信じて従っていく決意のしるしとして、各家は一匹の小羊を取り、ニサンの月の14日の晩に屠って、その血を戸口のかもいに塗り、その肉を種なしパンと共に食べ、帯を締め、手に杖を持ち、履物を履いて、出発を待ちました。

民は最初からエジプトを出るのに賛成していたわけはありませんでした。モーセとアロンはエジプトのファラオとだけではなく、イスラエルの民を説得するにもよく議論をしています。そして、民の中で「神の言葉を信じ、その言葉に従って、信頼して、将来に向かって先祖の国に歩いて行こう」と決心した人々が、その夜、小羊を食べました。

イエスは、小羊の代わりに、ご自分をテーブルに置きました。かつての出エジプトの過越しの夕食は、この日を表すしるしにすぎず、今こそ本当の生贄として、ご自分のからだを血を、新しい過越しの生贄として残しました。だから

ら私たちは、ミサの時、いつも祭壇の上に屠られて捧げられた、新しい過越しの小羊をいただいているのです。

シリアという地方で始まり、6世紀からはローマにわたって広がった習慣にしたがって、司祭がキリストの動作を繰り返して、パンを割って会衆に見せる時、会衆は皆、「神の小羊」と3回唱えます。私たちは、司祭をはじめ会衆も、あの部分を充分大切にしているとは言えません。それほど丁寧にしていないし、心をこめて唱えてもいないのは心が痛みます。司祭はあの、キリストの死を宣言する動作を、ゆっくりと、きれいに、その意味を伝えておこない、会衆はできるだけ歌ってほしいと思います。パウロは『私たちはこの動作を繰り返す時、キリストの死を宣べ伝える、キリストが来られる日まで』と書いています。その意識を持ってこの所作をおこなわなければならないと思います。

## ⑦「ヨハネの黙示」のミサのイメージ

ヨハネの黙示録の4章・5章をお読みください。これはミサのこと、聖体の神秘のことです。

ヨハネはエフェソに滞在していました。大阪のような大きな港のある国際的な町でした。パウロはそこに小さな教会を創立し、54年から57年の3年間滞在しました。ヨ

ハネはおそらく（伝説によれば）エルサレムが滅ぼされた時にマリア様を連れて、エフェソに移りました。集まっていた信者はエチオピア人もいたし、ローマ人もいたし、イスラエルのひとも多くいました。彼はそこで預言者として、将来、教会が世界に拡がることを見て、あの4章と5章を書くのです。集まっていた共同体の真ん中に神様がいて、エゼキエル預言者の言葉を用いてその言い表せない姿を書き記し、その神の前には祭壇の上に「屠られたような」小羊が立っています。復活された、生きているキリストです。周りには全世界から集まった人々、すべての国々の人々がおり、数知れない天使が集まって、その宇宙の万物が5章で小羊の勝利を歌います。これが私たちのミサのことです。

人間の歴史の中で、神が人間となられて、私たちのために死んで復活されたこと以上に大事なことはありません。神が私たちのために生贄となられ、その捧げられた、愛のしるしである御からだをくださることよりも大きな恵みはありません。そのしるしは、シンプルな簡単な動作で示されていますが、現実であり真実です。歴史の意味がすべてそこにあります。



## ⑧ひとつに結ばれる ―コムニオ

私たちはミサの構造に従って、つまりイエス・キリストが最後の晩餐の時に行われた動作を繰り返すことによって体験する現実の中で、最高の部分としてキリストの御からだを受け、キリストの御血を飲みます。それは現在日本語で「拝領」といいます。これは丁寧できれいな良い言葉ですが、意味合いとしては少し足りません。コムニオとは「交わり」と訳されますが、これもちょっと意味合いとしては弱い。「交わり」では「あなたはあなた、私は私、あの人はあの人。それが一緒になる。なんとかつながっている」という感じに思えます。

コムニオとは、一つになる、結ばれるということです。  
誰と誰が？

まず、神の子でありながら人間となられた みことば＝イエス・キリストがあなたと一つになります。典礼聖歌にある「キリストのように考え、キリストのように話し・・・」という、そのような人になります。キリストの御からだを受けて、その御血を飲んで、キリストになります。

パウロは、ガラテヤの教会への手紙の中で書いています。『私が生きているのは、もはや私ではなく、私のうちにキリストが生きておられる』これが、聖体拝領の意味です。

キリストに結ばれて一つになって、キリストのようなものになり、そして互いに結ばれて一つになる。一つの体、一つの心・・・と奉獻文の中で私たちは祈っているようになるのです。

本当にご聖体の意味を理解したうえで体験すれば、私たちは互いに一つになることができるのです。これは聖霊の恵みによるものです。

ミサの聖変化の前で唱えられる第1エピクレーシス（聖霊を求める祈り）は、「このパンはキリストの体になり、このぶどう酒はキリストの御血になりますように、聖霊を送ってください」という祈りです。

そして第2エピクレーシスは「この会衆、この御からだと御血にあずかる私たちが、一つの体、一つの心になりますように」という祈りです。

コムニオは神の夢です。お母さんは子どもたちが仲良くすることを望むでしょう？ 死ぬ前の遺言は「仲良くしてね」と言うでしょう？ イエス・キリストの遺言もこれです。『私があなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい』。ミサでご聖体を受けるコムニオは、そのキリストの言葉を実現する荘厳な約束なのです。



## 真命山・諸宗教対話センター

〒865-0133 熊本県玉名郡和水（なごみ）町  
蜻浦1391-7

☎ 0968-85-3100

Fax 0968-85-3186

e-mail [shinmeizan@chive.ocn.ne.jp](mailto:shinmeizan@chive.ocn.ne.jp)

真命山は、アルバート・シュバイツァー博士の遺徳を偲び、宗教法人生命山シュバイツァー寺を創建した古川泰龍師の協力を得て、1987年に、「生命山カトリック別院」として始まりました。2003年、宗教法人聖ザベリオ宣教会の事業として名を「真命山」の改め、これまでどおり、フランコ・ソットコルノラ神父が主宰しています。

霊性センター真命山は、日本の古典文化を大事にしながら、キリスト教霊性の日本文化受肉と、諸宗教対話促進の一翼を担おうとしています。

具体的には、神との出会いである「自然」、神のみ言葉を聴く条件である「静けさ」、他の宗教の信仰を持つ人々を兄弟として心から迎え入れる「歓待」と「対話」が、真命山の霊性の重要な特徴です。

真命山は、次の意向で来訪される方々を歓迎します。

- ・ 祈りの時を過ごし、静かに内省し、
- ・ 沈黙の中で黙想し、静修し、神のことばを聞く
- ・ 自然の中で自分の信仰の根源を探求する

真命山の一日の流れは、祈りと働きです。

午前 太陽が昇る時、朝の祈り  
座禅  
ミサ

午後 インマヌエルの祈り  
日没に合わせて、晩の祈り  
寝る前の祈り

第二木曜日は、

一般の方々の参加による一日祈りの集いがあります。

